

平成28年2月5日(金)

老球の細道208

## 福は内！ 鬼も内！

会津バスケットボール協会 室井 富仁

2月3日は節分だった。我が家でも豆まきの伝統イベントを孫娘にも楽しんでもらおうと息子が大張り切りで準備した。通販で購入した鬼のパンツや角を身に着けた鬼衣装で身をまとい、孫の前に参上するやいなや皆で豆のシュート。ところが、主人公の孫娘は恐怖で顔が引きつり号泣する事態となった。そのためイベントは突然中止。普段あまり泣かない孫娘の号泣ぶりを見て、トラウマになるのではないかと家族皆で落ち込んでしまった。

恥ずかしい話だが、ちょっと前まで「節分」とは何なのか、なぜ鬼が登場して豆まきをするのかわからなかった。皆がやっているから。辞書で「節分」を引くと隣に「接吻」が書いてあり、どうしてもそっちの方に目が移ってしまい集中できない。しかし、真面目に調べてみると、昔の人々の季節の行事によせる生活の知恵や想いに感心させられる。

節分は、もともとは季節の分かれ目のことで四季それぞれにあった。なぜいつの間にか立春の前日だけをいうようになったのか。どの季節よりも春が待たれることからそうになったとか。冬の季節が終わって春の季節に移るということから「節分」という。

この日は各地の神社や寺で追儺の行事が行われた。これは中国から伝わったといわれるが、日本では706年文武天皇が最初に行ったという記録が「続日本記」に載っている。その頃は桃の木の杖や弓で鬼を追い払ったという。桃は百鬼を防ぐという中国からの思想からきている。豆が使われるようになったのは室町時代ごろから。その由来は定かではないが、昔の人も大豆が栄養豊富な食品であることを知っていて、それに特別な力があると信じたのではないかとされている。まさに信は力なり。

「節分」は季節の変わり目にあたり、中国では陰と陽とが対立して邪気を生じ災禍をもたらすといういわれから、悪霊、災厄を払うために 鬼打ちとして豆をまいたり、強い臭気で鬼を追い払うためにイワシの頭やニンニクを、鬼の目つきとして柀（ひいらぎ）の枝を戸口にさした。我が家では豆まきと私の「加齢臭」で鬼をやっつけた。

ところで、豆まきのときの掛け声は「福は内！ 鬼は外！」が定番だが、そうでもない人たちもいる。2月3日の朝日新聞「折々のことば」では「福は内、鬼も内」（梅原猛）が掲載されていた。興味深い内容なので紹介したい。

【「創造者というものは一種の鬼を自分の中にもっていないかったら優れた仕事はできない」と哲学者は言う。鬼は小心な計算を嗤（わら）う魔物かもしれない。怨みを残して逝った死者かも、おそるべき風体をした異人かもしれない。いずれにせよ、訳もわからないまま内から激しく突き上げてくるものに身を開いておかないと、人は何かを創ることができない】

かつて私の身の回りにも鬼を内に飼っていた人物がたくさんいた。「練習の鬼」「勉強の鬼」「勝負の鬼」「遅刻の鬼」などと称され、よくも悪くも、その生活における徹底ぶりと一途さには周囲の人々は一目も二目もおいたものである。

「ほどほどに」「普通に」「人並みに」がもてはやされる昨今、鬼はますます「鬼は外」で邪魔者にされてしまう。あの世で鬼に会っても孫娘のようにビビらないために、常に自分の内なる鬼をスタンバイさせて、まだまだ優れた仕事をしたいものである。